田遊び祭りの概念

折口信夫

青空文庫

一　田遊び・田儛ひ・田楽

日本には、田に関する演芸が、略三種類ある。第一は、田遊びである。此行事は、余程、古くから行はれたものと思ふ。次は田儛ひで、此も、奈良朝以前既にあつた。第三は、平安朝の末に見え出して、鎌倉に栄え、室町に復活した、田楽である。

田遊びは又、春田打ちとも言ふ。所によつては、此を暮れに行ふ事もあるが、多くは正月に行ふので、現在でも、新旧の正月に此を行ふ地方が、まだ方々にある。勿論現在行はれて居るものは、いろ〳〵形が変つて了うたものが多いが、東京附近では、赤塚村の諏訪神社で行はれるものが、一つの典型的な形と見られる。

田儛ひに就いては、古い文献もある。日本紀に、天智天皇の十年五月、群臣と西小殿に宴して、此を御覧ぜられた事が出て居る。田儛ひの名が、ものゝ上に見えて居るのは、此が最初であるが、実際はもつと、古くからあつたに相違ない。

しかし、此田儛ひは、早く民間を離れて、宮廷のものになつて了うた様だ。少し後れては、雅楽寮の諸師の員数を定めた中に、田儛師幾人を置く、と規定した官符などが見られるほどで、其頃になつては、最早、民間の行事ではなくなつて了うて居たと思はれるが、やはり此は、元は五月の田植ゑに関したものが、いつか宮廷に採り入れられて、舞ひぶりで、変化させられた

のだと思ふ。

田歌を、田儛ひの歌詞であつたと見るのには、問題がある様だが、此二者には、どうも関係があるらしい。其を見ると、三四月の候に行はれる、鎮花祭の歌と殆、同じものだ。尠くとも、田儛ひは、それの行はれた時期から見ても、五月の田植ゑから出た事が考へられる。それの雅楽化したものだ、と見ていゝ様だ。

二　田遊びと田楽との関係

田楽は、此後に出て来たので、平安朝の末頃から、田遊びと田楽とが、並行して行はれて居る。此問題では、親友・畏友達の間にも、賛成して貰へない様な点があるのであるが、栄華物語の中に、田遊びの事が出て居る。此も、解釈がいろ〳〵に岐れて居る。

　またでむがくといひて、あやしき様なるつゞみ、こしにゆひつけて、笛ふき、佐々良といふ物つき、さま〳〵〳〵〳〵の舞ひして、あやしの男ども歌うたひ、ゑひて心地よげにほこりて、十人ばかりあり云々。

とある。此でむがくは、鼓の名だとする説がある。尤、鼓にもあつて、其は田つゞみとも言ふが、此場合の文章では、此は鼓の事ではない。「田遊び」に並べて、「また田楽といつて、人員十人ばかりが、さま〳〵〳〵〳〵の舞ひを舞うた」ので、「田遊び」と「田楽」とが、同時に並ん

で行はれた、一つの例と見られるのである。

一口に言へば、五月田植ゑの際に行はれた、田遊び（歌舞（アソビ））が、平安朝の末に、呪師（ノロジ）出の法体芸人の手に移つて――当時の民俗芸術の影響をうけて――変化したもの――或は合体したと見てもいゝ――演芸化したものが、田楽であると見ていゝ。勿論、此演芸化には、種々な原因がある。すべて民俗芸術の成立は、たつた一つの原因からばかりは見られない。いろ〳〵なものが関係して、其を作り上げて居る。

田楽はさうして、元の形からは変つたものが出来たのであるが、田遊びは、元のまゝのものが残つたのだ。前の栄華物語を見ても、田主（タアルジ）・翁・高足駄などが中心となつて、行事が行はれて居た。かやうに田遊びは、一方民俗芸術化して、田楽と言ふものになつたが、而も此二つが、並んで行はれた。大山寺絵巻では、田遊びと田楽と、此二つの交つたものが描かれて居るが、やはり此二つは、並び行はれたものだと思ふ。田楽が出来ても、其為に、田遊びが忘れられたとは、考へられない。また田遊びが、簡単に田楽に変つたのだなどゝも申されない。

三　田遊びの意味

田遊びのあそぶは、古い用語例では、鎮魂を行ふ為の舞踊を言うたのだが、其後、意味が段々変つて、主としては、楽器を用ゐるものに就いて言ふ様になり、後には、野山に狩りをする事

をまで、此語で言ふ様になつたが、元来は、鎮魂の為の舞踊を意味した語で、田遊びとは、とりも直さず、田の鎮魂術を行ふ事だつたのである。此考へは、恐らく間違ひがない、と今の自分は信じて居る。

田遊びは、余程古くからあつたが、古くは、此を行ふ時期はいつであつたか。普通には、五月田植ゑの時と云ふが、私は、さうは思はない。此式の行はれたのは、年の始めか、旧年の暮れに取り越して置いたのである。其が、其だけでは、効果が薄い様に考へて、さなへを植ゑる時に、もう一度此を行ふ様になつた。だから、元来は田植ゑの時にはなかつたものだ。此には、証拠がある。

春の初めに、其年の一年中の田の出来栄えを見せて置く。此が、此行事の起りである。其出来栄えは、誰が見せたか。神――遠来の神――であつたとも、其神の命令に従ふ土地の神であつたとも、或は、さうした遠来の神の命令があるので、為方なしに土地の精霊が、誓約のしるしに、此を行うて見せたのだとも考へられる。あちこちの地方で行はれて居るものを見ると、此が殆、混同して行はれて居る。しかし、大体に於いて、かういふ風にしろと見せて行くのと、私の方では、かういふ風に致しますとして見せるのと、此二つの様である。勿論、さう論理に合ふ様には、どこでだつて行うて居ない。

とにかく、この行事は、神或は神の資格を有するものによつて行はれる。その神は、尉と姥との形をして来るのが普通であるが、ところによつては、違うた形のものもある。東北地方では、

妖怪の姿に変つて居る。大黒・夷の出る地方などもある。神楽では、この尉と姥とが、猿田彦と鈿女とに変つて居るが、この二人に変つたのには、訣がある。それは、此二人が擁き合ふところがあるからだ。此二人の役の主たるところは、其点にある。昔の人は、其を見て、ほがらかな喜びを感じたのだと思ふ。

四　田遊びに出る翁と媼と

歴史の上では、この尉と姥とに就いて、たつた一つだけ、似た例のあるのが、見られるやうである。近世まで跡を引いた、民間に伝承せられた民俗の方では、爺婆の出て来るのは、殆普通の事になつて居るのに、文献では、たつた一つしか例がないのだ。神武紀に書き残された、椎根津彦（シネツヒコ）と弟猾（オトウカシ）との二人が、香具山の埴（ハニツチ）を大和の代表物（モノザネ）として、呪する為にとりに行つた話に、其が見られる。椎根津彦は、簑笠を着て翁になり、弟猾は、箕を被つて媼に扮（ヤツ）し、敵中を抜けて、使命を果したとする。従来、弟猾は男の様に考へられて来たが、此は女性の神巫（ミコ）だつたのである。兄が君主で、妹が最高の神巫である場合が多かつた。昔から、此二人が村々を訪問した。其が長い後まで、農村に伝承せられて、遂に尉と姥との形にまで変つて残つたのである。田遊びの行事は、この翁媼の二人が、中心となつて行はれる。代かきの真似をする。雪をならして、松葉を植ゑる。処によつては、「もう穂が出た」などゝ、褒め言葉を言ふ。かうして刈

り入れまでの所作の演ぜられるのがほんとうなのだが、其一部だけを行うても、効果はあると信じた。

此春田打ちは、田の精霊を鎮める為に行うた。其鎮魂術の舞踊が、後世に残り、五月、早苗を植ゑる時に、もう一度、これを行うた。もう一度翁が出て来て、踏み鎮めの舞ひを舞うた——或は、踊りを踊つた。翁に対して、田主（タアルジ）——太郎次などゝ変りもした——が出る。此を田の持ち主と解釈する人もあるが、実は、田の精霊を象形（カタド）つたものだと思ふ。この二人が中心となつて、いろ〳〵な行事を行うたのだが、その中に、此が段々芸能化されて、田楽が出来た。勿論、田楽が出来たには、他にいろ〳〵な原因があるので、此が直接に、変化したのだとは言はれない。

地方を歩いて見ると、田楽と称するものにも、いろ〳〵なものがある。円陣を作り、編木（サヽラ）を用ゐるのがある。竹馬に乗つたり、曲芸の様な事をしたりするのがある。又、田楽能を主にして居る処もある。此中、どれが田楽であるかなどゝは、容易に言へない。田楽と称せられるものを、かなりあちらこちら見て歩いたが、要するに、平安朝の末から、鎌倉・室町へかけて、段々内容のふえて来たものゝ、其中の一部分だけを行つて居るので、決して、円陣を作つて、編木を用ゐるものだけが田楽である、などゝは言はれないと思ふ。さう信じなければ、地方の総てのものが、解決出来ない。田楽の出来たには、沢山の原因があるのだが、先、田儛ひ——此は古い。と言うても、書物の上で古いと見られるのだ——と同じ道を歩いて、此田楽も出来た

のだと言ふ事だけは、見当がつく。

田楽には、念仏の要素が、多分にある。踏歌の節会の姿も具へて居る。此が宗教化して、念仏宗の発達する、非常に大きなものになつて居るので、念仏宗の恍惚状態は、田楽と共通して居る。併し此には、長い説明を要するので、今は省く。

五　田遊び行事の種々

かまけわざ

田遊びには、いろ〳〵な行事が行はれるが、その中心になつて居るものは、翁・嫗の所作である。それから、田畑の行事には、性的の聯想が出て来るので、感染所作（カマケワザ）がある。田ばらみ——此は、地名にもなつて居る——の行事がある。又、さをとめが出て来る（今日実演される赤塚村のものにも、此を呼ぶ式があり、同所では、子供が出ることになつて居る）。此は、顔を包んで、神と一緒に為事をするものなので、沢山出て来る訣なのだ。頭髪を深く、布・帯の類で顔を包み、其上に、赭土・白粉で隠すのが、本態である。

此さをとめに対しては、性的の行事を伴うて居るところが多い。地方によつては、此中の主なるものを、田の泥にまみれさすのがある。田の神への犠牲として、生埋めにした名残りだ、と言ふ説があるが、私はまだ、其は信じられないで居る。

さをとめの出ない処では、子守りが出る。初めの所作を略して、結果だけを見せるのだと考へると、解釈はつくと思ふ（赤塚の田遊びでは、よねぼと言ふのが持ち出される。男子の生殖器に、手足が出来たのだと信じられてゐる様だが、生殖器に、手足の出来るのは、をかしい。やはり子守りの形だと思ふ。勿論、此が生殖器に変化したには、理由はあるのだ）。

かけひ

田楽の方では、此らの行事が芸能化されて居る。狂言になつて行くので、其もとが、田遊びにあるのだ。此だけの事は、今も方々に残つて居るものから、断言出来る。実際に其証拠の残つて居る事は、書物の上に、たつた一箇所出て居る事よりも、確かだと言へる。書物は、総てのものを記録して居るわけではない。殊に、田舎のものなどは、見逃し勝ちである。狂言になつて行くものを、かけひとなづける。

鬼と天狗と

先、田遊びには、鬼が出る。時には、此が同時に天狗である事もある。昔は、この二つは同じものだつたので、鬼なり天狗なりが出て来て、田遊びを助成するしぐさがあつたのだ。ところが、民間の習はしの情ないことには、鬼・天狗と言ふ名に囚はれて、却つて此を邪魔する奴だ、と解釈する様になつた為に、今では、此らのものを降伏させる儀式が生れて居る。勿論、さうなつて行つたには、神と精霊との争ひ、精霊の降伏といふ、古い事実が印象されて居る、と見られる点もある。其でも、地方によつては、鬼と呼びながら、此を大切にしてゐるところもあ

る。結局は、鬼も天狗も、大切なものだつたので、尉と姥と、同じ形のものだつた。だから、田楽では、天狗が大切なものになつて居る。此から、高時の天狗舞ひの様な、修羅物が出来て来たのである。

獅子と駒と

次に、獅子と駒とが出る。此二者も、元は農村を護るものであつたのだが、今では両者とも、悪いもの・妨げをするものと解釈されて、降伏させる形になつて居るのが多い。

此は、呉楽（クレ）にまで溯つて見なければならぬと思ふ。呉楽が段々変じて、田楽に採り入れられ、大神楽にもなつたので、今では、悪魔を退散させるものゝ様でもあり、悪魔そのものでもある様な、訣の訣らないものになつてしまうてゐるが、此の出て来るにも、種々な意味があり、多くの変化があるが、其種の一つは、鹿である。古くは、鹿・猪、共にしゝ（シシ）と言うた。肉の供給者の意である。さうして、鹿は、農村を荒す動物の代表物と見られて居たので、随つて、悪霊の代表とも見られ、此を謝らして、農作の保証をさせる所作が、古くからあつた様だ。

日本の芸能の上では、此が面白かつたと見えて、いろ〳〵なものに、其が採り入れられて居る。鹿と獅子との合同した跡は、極めてはつきりして居る。決して突然に、あんなものが出来た訣ではない。勿論、此鹿の謝罪誓約が、獅子舞ひの全部ではない。鹿の降伏する所作を持つた舞ひの上に、獅子舞ひが入つて来たとも見られる。とにかく、古く日本の芸能に、鹿の謝る所作を持つたものゝあつた事だけは、万葉集を見ても訣る。万葉集には、鹿の謝る歌が、長歌に一

首、旋頭歌に一首と二首も、それがある。

駒は、獅子に対する狛犬（コマ）である。今は神社にだけ残つたが、元は、貴族の間に使はれて居た。其が今日では、狛を駒と解して、馬の形に変つてしまつたから、訣が訣らなくなつて了うた。さうして、獅子と共に、降伏するのか、悪魔払ひなのか、訣らぬものになつて了うたのである。

牛の代かき

次に牛が出る。此は、田の神――水の神と同じもの――の犠牲（ニヘ）なのだ。或は、田の神の為に働くものであつた。後には、実際に耕作の助けをしたので、行事にも、代かきに出る事になつてゐる。古くは、田の神の犠として大切がられたので、牛の肉を喰べた為に稲虫が発生した、など〻言ふ附会説が出来たのも、やはり此が、神の食物と考へられて居た、印象から出て居るのだと思はれる。

神と精霊との問答

田遊びの行事は、此らのものが、掛け合ひの形をとつて行はれるのが普通であるが、此掛け合ひの代表的なものと見られ、特別なものと見られるのは、尉と姥の掛け合ひである。ところによつては、媼が出ないで、翁だけが、二人或は三人出るところもある。此は、一人は田主（タアルジ）――田の精霊――で、もう一人は、此精霊を降伏させ、田の物成りの保証をさせに来る、遠来神である。能楽では、此二人が、白尉・黒尉で表され、外に千歳が出る。能楽の千歳は、若衆型で行はれる。

此神と精霊との間に、神授・誓約の問答のあるのが、古い姿であつたと思ふが、今は、いろ〳〵に変つて居る。しかし結局、田の害物が除かれて、物成りのよくなる約束が、出来る事になるのである。

群行・練道

更に此行事で、注意しなければならぬ事の一つは、此をやる役者が、其附属して居る家は勿論、寺や社へ、其土地を褒め、田畑を褒めに、寺や社へ練り込む事である。田楽では、此が中門口となつて残つたのだが、此は、日本の宗教・芸術の発達の上では、見逃す事の出来ない、大きなものゝ一つである。

此は、服従の位置にあるものゝ、大きな為事になつて居た。此服従者は、寺の場合には、羅刹神——仏教擁護の神——と言はれて居る。大きな神社には、必附随して居るので、麻陀羅神などゝも言うた。

赤塚の諏訪の社は、相当に古い社だと思ふ。此所では、此服従者が、十羅刹女神と謂はれて居る。だから、世間からは、こゝの田遊びを、十羅刹女神の春祭りだ、と考へられて居た様だ。恐らく此行事が、十羅刹女神の祠から、練り出す形で行はれたのだらうと思ふ。勿論、今は忘れられてゐる。だが其でも、此祠の前で、天狗の吠える式があるらしい。日本の神道では、神の叱りと言ふものが、大切な事になつて居た。古い信仰の印象が、さうした形で残つたのだと思ふ。

田遊びは、初春の行事であつたのが、元の形である。其が、五月に繰り返され、更に七月にも行はれる様になつて、愈盛んになつた。五月田植ゑの時に移し行はれたのは、如何にも、実感に適するからであつた。七月に行はれる様になつたのは、稲の穂の出る時であり、また、不安の伴ふ時期であつたからだと思ふ。要するに初春の行事だつた、春田打ちの延長と見られるのである。

青空文庫情報

底本：「折口信夫全集　3」中央公論社
　　1995（平成7）年4月10日初版発行
底本の親本：「『古代研究』第一部　民俗学篇第二」大岡山書店
　　1930（昭和5）年6月20日
初出：「民俗芸術　第二巻第九号」
　　1929（昭和4）年9月
※底本の題名の下に書かれている「昭和四年六月二十九日、郷土研究会講演筆記。昭和四年九月「民俗芸術」第二巻第九号」はファイル末の「初出」欄、末尾注記欄に移しました。
※底本では「訓点送り仮名」と注記されている文字は本文中に小書き右寄せになっています。
入力：門田裕志
校正：仙酔ゑびす
2007年5月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

田遊び祭りの概念

折口信夫

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/